

清平調詞 其一、其二

報告：花岡風子

今回のお題は七言絶句二首『清平調詞』其一と同其二でした。作者は李白。唐王朝の最盛期、玄宗皇帝からお題を頂いて即興で作った詩ということです。

さて、李白という詩人は綿州(今の四川省綿陽市)の出身

とされていますが、実際生まれたのは^{スィアブ}稗葉という、今のキルギス共和国の辺りだったのだそうです。異民族の血を受けているという説もあります。

父はシルクロードを往来する行商人でした。母のことはよく分かっていませんが、母が太白星(金星)を踏んで身ごもったとのことで、字を太白と^{あざな}いいます。号は青蓮居士。青少年期には仙人に憧れ、道士の修行をしたり、侠客と交わったりして自由奔放な生活を送っていたようです。25歳にして青雲の志を抱き、三峡を下って中央に出てきました。

李白には、当時の若者たちにとって立身出世の登竜門であった科挙を受けた形跡がありません。一つには受ける気がなかったか、あるいは出自の関係で、然るべき推薦者を得られなかったから、とも言われています。

41歳の時、^{せんちゅう}剡中(今の江蘇省剡県)で^{えん}呉筠という道士に出会い、翌年その道士が玄宗皇帝に招かれて上京。さらにその^{ごいん}呉筠の推薦を経て、玄宗皇帝に見えることになったとも伝えられます。また、742年には、^{がちしやう}賀知章(659～744)の知遇を得て玄宗に見え、その推挙を受けて^{かんりんぐぶ}翰林供奉となったとも伝えられます。そのとき賀知章が李白のことを「^{たくせんじん}謫仙人」(天界から追放されて人間界に降りてきた仙人)と言って褒めあげたことは有名な話です。

しかし李白の上京、玄宗との対面の経緯につい

清平調詞 其一

yún xiǎng yī shang huā xiǎng róng
云想衣裳花想容
chūn fēng fú kǎn lù huá nóng
春风拂槛露华浓
ruò fēi qún yù shān tóu jiàn
若非群玉山頭見
huì xiàng yáo tái yuè xià féng
会向瑶台月下逢

雲には衣裳を想い華には容を想う
しゅんぷうかん はら ろかこま
春風檻を払うて露華濃やかなり
も ぐんぎょくさんとう あら
若し群玉山頭に見るに非ずんば
かなら ようだいげつか む あ
会ず瑶台月下に向かつて逢わん

ては、諸説が有ってあまりはっきりしません。それはともかくとして道教に並々ならぬ関心を寄せていた玄宗にとって、李白はとても魅力的な人物と映ったようです。

42歳の秋に玄宗皇帝に見えた後、43歳から丸一年程、玄宗の寵愛を得て自由奔放に振舞い、宮廷詩人として大活躍します。「李白一斗詩百篇、^{ちやうあんしじやうしゆ}長安市上酒家に眠る。^{てんしよ}天子呼び来れども^{のぼ}船に上らず、自ら称す臣は是れ酒中の仙なりと」(『飲中八仙歌』)とは、杜甫が後にその豪遊ぶりを想像しながら詠ったものですが、その李白も44歳の時には追放されてしまいます。

今回の二首はそんな李白を宮廷詩人の地位に押し上げたデビュー作でもあり、その後の失脚の原因にもなったという、いわく付きの作品です。

この詩は七言絶句の形を取っていますが、「清平調」とは楽曲の調子の名称の一つです。「詞」とは、その歌詞のことです。その場で当時の名歌手^{りきねん}李龜年によって、鳴り物入りで賑々しく披露されたものと伝えられています。

意味はこうです。

雲を見れば楊貴妃の美しい衣裳が目につかび、
牡丹の花を見れば楊貴妃の美貌が思い浮かぶ。
春風は沈香亭(玄宗が楊貴妃と牡丹を賞で

た場所)の手すりを吹き抜け
牡丹を濡らす美しい露は艶やかだ。
これほどの美人は、群玉山^{ぐんぎょくさん}¹⁾のあたりで見
かけるのでなければ、
瑶台^{ようだい}²⁾の月明かりの下^{もと}でしかめぐり合えな
いだろう。

さて、この詩を理解するには、詩の主人公である玄宗皇帝と楊貴妃のことにも触れなければなりません。楊貴妃、名は玉環^{ぎよくかん}。楊貴妃と言えば日本でも知らない人はいない、中国唐代きっての美女ですね。今年の2月に上映された映画『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎』にも二人は華やかさを極めて登場していました。楊貴妃はなんと元々は玄宗皇帝の息子寿王の妃でした。ところがあまりに美しいので、玄宗が横恋慕して取り上げてしまったのです。

直接取り上げるのは流石に物議をかもし、とのことで一旦彼女を道士にして、名前も楊太真^{ようたいしん}と改め、夫である息子から引き離してしまいます。李白が宮廷に入った頃はちょうどそんな頃だったようです。道士にしたとはいえ、堂々と側に侍らせていました。後に還俗させ、貴妃という、皇后に次ぐ位につけます。

「息子の嫁を奪うなんて、親としたら最低ですよねー。まあ、それが権力者というものなのか。普通の男には出来ませんねえ」と植田先生。

楊貴妃は容貌が麗しいばかりでなく、歌や踊りに秀でており、それが芸術好きの玄宗皇帝には魅力だったようです。日夜宴会を催しては、楊貴妃

に歌い舞わせていたのでしょう。そこで、ありきたりの歌でなく、なんとか楊貴妃の美しさを歌った特別な歌を作らせようとのことで、その歌詞を書くように、と李白に命が下されたというわけです。

この時李白はベロベロに泥酔していましたが、酔いの勢いで一気に書き上げたのが、この詩だということです。

玄宗皇帝は日ごろから格別に牡丹を好み、牡丹の花を楊貴妃の美しさと重ね合わせていました。李白はその玄宗の好みを巧みにとらえて、牡丹の花の美しさを歌いながらも楊貴妃の美しさを暗示する。そしてさらに仙界にまで思いを致す。人と花、幻想と現実が交錯した実に見事な出来栄です。「言ってしまうとゴマスリの詩だけど、ここまで来れば芸術になるね」と植田先生。私個人としては、李白のこの詩は見事と言えは見事だけれど、あまり後味の良さを感じないのが正直なところ。

次は其二です。この歌は伝説が下敷きになっていますので、それから解説せねばなりません。

昔、楚の国に懐王^{かいおう}という君主がいたのですが、洞庭湖^{こうとう}にほど近い高唐^{こうとう}という場所に来た時、ある夢を見ました。夢の中で美しい巫山^{ふざん}の仙女と懇ろになりました。巫山とは仙女が住む山の名です。そして別れ際に仙女が「これから私は朝には雲になり、夕には雨となって貴方に会いに行きます」と言ったところでパッと目が覚めました。

この事があってから懐王は寝ても覚めてもその仙女のことを思い焦がれたけれども、二度と夢で会うことすらできなかったそうです。後に「雲雨」

とは男女の交わりを指すようになりました。

このストーリーの元は、屈原と並び称される楚の国の詩人宋玉の『高唐賦』に書かれていて非常に有名なのだそうです。二句目の「雲雨巫山むなしく断腸」とは、懐王は夢で一度

qīng píng tiáo cí qí èr
清平调词 其二

yī zhī hóng yàn lù níng xiāng
一枝浓艳露凝香

yún yǔ wú shān wǎng duàn cháng
云雨巫山枉断肠

jiè wèn hàn gōng shuí dé sì
借问汉宫谁得似

kě lián fēi yàn yī xīn zhuāng
可怜飞燕倚新妆

こうえんつゆかり こ
一枝の紅艶露香を凝らす

うんう ふざんむな だんちよう
雲雨巫山枉しく断腸

しゃもん かんきゅうたれ に え
借問す漢宮誰か似たるを得ん

かれん ひえんしんしやう よ
可憐の飛燕新粧に倚る

逢えたきりで、後はただ懐王を苦しめただけだったのに、楊貴妃は実在して、皇帝の側に仕えているのだから、玄宗皇帝がいかに幸せであるか。また「可憐の飛燕新粧に倚る」とは、どの女性が楊貴妃と比べられるかということ、漢王朝の後宮随一の美人とされる、あの可憐なる趙飛燕³⁾ だけだ。しかも、それは化粧をした後の趙飛燕であって、そのまま美しい楊貴妃とは比べ物にならない。これも相当なゴマスリの詩で、玄宗皇帝を大いに喜ばせたのですが、しかし、ゴマの擦り方に工夫が足りなかったのか、後に讒言の材料になってしまったのでした。

それというのも、李白の横柄な態度に恨みを抱いていた高力士という宦官に言い掛かりを付けられたのです。「天下の美人楊貴妃様を、あの庶民出身で、最後は不幸な死に方をした趙飛燕が如きと同列に並べるとは、何事か」と。確かに趙飛燕は美しいとはいえ賤しい身分の出で、寵愛を受けた成帝の死後は庶民に身分を落とされたうえ、自殺したという不幸な生涯を持つ女性でした。

高力士の言葉に煽られて、楊貴妃まで李白を嫌うようになってしまったので、玄宗皇帝はやむなく李白に盛り沢山の財貨を持たせて追放したのだそうです。但し、李白追放の理由については諸説あり、必ずしも一定しているわけではありません。

この十数年後、安祿山の乱により、玄宗皇帝にも失意の時が訪れます。永遠を誓った楊貴妃との恋も、楊貴妃の死とともに尽き果てます。歴史の荒波の中で、このひと時の栄華を詠った詩は、詩の内容そのものよりも「その時」を取り巻く人物たちの人生の一部を鮮やかに切り取ったもの……そういう感じがします。写真や画像は歴史の一瞬を捉える芸術と言えますが、詩もそうだなあ、と改めて感じました。

「華々しいデビュー一作が失脚の原因にもなったんですねえ。ま、人間、さえないままでもいいから、じっくり長生きした方が良いんですかねー」とい

う植田先生のコメントに一同失笑。確かに、一気に人気絶頂に上り詰めたあと大転落するよりは、そんなジェットコースターのような世界とは一線を画して、ゆったりと自分の世界を楽しんでいくのも一つの生き方ですね。しかし李白は追放された後も次々と名作を残していきます。今日愛誦されている作品の多くは追放後のものです。さすが天才李白ですね。

この後は中国語で朗読の練習をしましたが、音読することで、詩とは「リズム」であることを参加者全員で体感しました。

漢詩を日本語の書き下し文にしたとたん、原詩のもつリズムと味わいが異なってしまいます。「日本古来のものと思われている3・3・7拍子も漢詩と共通しています。ひょっとしたらあのリズムは漢詩から来たのかもしれないね」と植田先生はおっしゃりながら3・3・7拍子のリズムで漢詩を読んでくださったのでびっくりしました。

詩はまさしくリズム。声に出して読んだとき、それは音の世界でもありません。強弱、高低、緩急。読み方によって詩全体のイメージも大きく変わります。読み手の気分によっても味わいが変わってきます。昨今、何もかもがデジタル化してしまい、五感で味わう機会が減っています。リズムに乗って声を出し、その音が身体のどこにどう反応するかを確かめながら、頭の中の空想の世界と重ね合わせていく……。漢詩の朗読会はある意味、人間らしい感覚を取り戻すとて贅沢な時間かもしれない。

■注

1) 群玉山：玉山とも言う。西王母の住む山

2) 瑤台：仙人の住むところ

3) 趙飛燕：中国前漢の成帝（在位前33～37）の皇后。庶民の出身。歌舞に巧みで、成帝の目に止り、女官となり、のち皇后となった。妹の昭儀（合徳）も召され、姉妹で成帝の寵を争ったという。平帝のとき、王莽の上奏で庶人に落され、自殺した。この姉妹を描いた『趙飛燕外伝』は六朝時代の小説で、日本の平安時代の宮廷女流文学者に広く読まれた。